

笛吹市探訪 甲斐国分寺・金堂・講堂跡

第51回の笛吹市探訪で甲斐国分寺跡の金堂跡の発掘調査成果を報告しました。その後、平成21・22年度も発掘調査を実施しました。その結果について紹介します。



講堂跡正面階段と石敷

シリーズ第73回

国分寺は、聖武天皇が天平13年（741）に国の安泰を願って全国に建立した寺院で、現在の一宮町国分に建てられました。平成21年度の発掘調査は、20年

度に続き金堂跡とさらに講堂跡について行いました。

平成20年度の調査で礎石が3つ見つかった이었습니다。礎石は、元の位置にはなかったため、柱の位置を確認するための調査を行いました。他の礎石や柱の位置を示す掘り込みなどは見つかりませんでした。しかし、20年度に考えていた東端よりもさらに東に基壇（土を盛り上げて突き固めて造った地盤）を発見し、20年度に考えていた金堂の東西幅が大きくなることになりました。基壇の東側は戦国時代の遺構に壊されており、確実なことはいえませんが、金堂の東西幅は約41〜42mはありそうです。ちなみに、南北幅は22・6mあります。

また、金堂正面の階段の東端を確認して行いましたので、西端を確認する調査を実施しました。平成20年度の調査では階段の幅を9・6mと想定して行いましたが、今回の調査で、階段の西端を検出し、10・8mであることがわかりました。また、金堂跡正面の石敷は南北3m幅で確認して行いましたが、今回の調査で幅6m確認し、それ以上ありそうです。

甲斐国分寺は回廊（建物や中庭などを屈折して取り囲むように造られた廊下）が金堂に取り付いていたことがわかってはいますが、金堂側面のどこにつくかを調査しました。結果、金堂側面の中央部分に取り付いていたことが判明しました。

講堂跡の調査では、講堂正面南側にも石敷を発見し、金堂の北側でも石敷を確認しているため、金堂と講堂の間には石が敷かれていたと考えられます。石敷は金堂・講堂の周囲に敷かれており、雨だれで土地がくぼむのを防ぐ機能と同時に見た目を荘厳にするために敷かれたものと考えられます。これが、他の国分寺跡では見られない甲斐国分寺跡の最大の特徴です。

さらに、講堂南側の基壇化粧（きだんげしょう、基壇の側面の積土の被い）の石も確認することができ、講堂の基壇の大きさが判明しました。東西32・4m、南北19・6mあります。

平成22年度の調査では、講堂跡と回廊の調査を行いました。講堂跡では、正面の石で造られた階段が2つ見つかりました。古代の寺院跡で石階段の出土は大変

貴重なものであります。現在でも講堂跡には礎石が数多く残っています。講堂の東西の柱間は7つありますが、階段の1つは、中央の柱間に合う幅で発見しました。三段発見し、もう数段ありそうで、幅は3・9mあります。

もう1つは、柱間の東から2つ目のところで階段を検出しました。これも柱の間に合う幅で、3・5mあり、三段あり、これももう数段あるようです。

当時の寺院の建物は左右対称で造られていたので、西側にも階段があったことが想定できます。つまり、講堂正面には階段が3つあったことが判明しました。これも、荘厳に見せるためのものでありましょう。

金堂の西側の回廊跡を調査しました。金堂から延びる東西の回廊がどこで折れ曲がり南へ延びるのかを調査し、その場所がわかりました。ちなみに回廊の幅は約7mあります。

今回の調査でも新たな発見が多くありましたが、まだわからないこともあります。今後は、講堂北側の階段の確認や回廊の柱の位置や中門などの調査を行います。